

よこい ひであき
横井 英昭

株式会社インスティテュート代表取締役
株式会社 船井総合研究所
客員コンサルタント

甲田光雄先生と船井幸雄先生、 そして西式甲田療法



横井 英昭(よこい ひであき)

関西外国語大学卒業後、オートボックスセブン入社。マーチャンダイジング、営業企画、経営企画、新規事業開発等の職務を経て、2000年、オートボックスセブン取締役就任。2003年、エクゼクティブオフィサーも兼務し、マーチャンダイジング、マーケティング、新規事業開発、人事、企業風土改革などを担当。それらの経験から経営戦略全般、チェーンストア理論、マーケティング、マーチャンダイジング理論と実務に詳しい人事制度改革、組織改革、教育システム改革、企業文化の意図的醸成などの分野に精通。また入社以来オートボックスグループの欧米視察研究の事務局長、団長等を30年にわたって担当、欧米の流通事情にも詳しくなる。2006年、㈱カーライフ総合研究所代表取締役役に就任。オートボックスグループの教育、コンサルテーションおよびグループ外の複数の上場企業のコンサルティングを手がける。2009年、欧州復興開発銀行(EBRD) TAMプログラムシニアアドバイザー就任。2010年、オートボックスセブンを離れ、独立。(株)船井総合研究所、客員コンサルタント就任。

今回、このように西式甲田療法に関して月刊

『ザ・フナイ』の読者の皆さんにお知らせする機会を得て大変うれしく思っています。というのも故

甲田光雄先生は勿論のこと本誌の主幹であられた船井先生とも大変深いご縁を頂いていたからです。

西式甲田療法との出会いと オートボックス「経営の三本柱」

私は大学卒業後、(株)オートボックスセブンに入社しました。皆さんもご存知のカー用品のオート

ボックスを運営する本部会社ですが、私が入社したころはオートボックス事業を始めたばかり、中小企業に毛が生えたような小さな会社でした。

創業者の故住野敏郎すみのとしおさんは五十代の壮年、大変お元気で経営の指揮をとられていました。

住野さんの経営法には際立った獨創性がありました。その獨創性こそが大阪の小さなカー用品卸会社を世界一の規模まで押し上げた原動力であったというのが、四十年のオートボックスの歴史を実際に体験した私の実感でもあ

ります。

その独創性を象徴するのが、オートボックス「経営の三本柱」です。

柱は一本でも、二本でも安定しません。三本あって初めて安定するという意味を込めて、

- (1) S M I
- (2) 西式健康法

- (3) オートボックスフランチャイズシステム

の三つの柱が住野さん自らによって定められました。

それぞれ簡単に説明します。先ず「S M I」ですが、これはアメリカのポールJ. マイヤーさんが始めた成功実現法です。日本的に言うならば「念ずれば花開く」、夢や願望を信念化することで、実現せしめるメソッド(方法)を体系化したものです。

オートボックスの当時の社是は「願望実現」、住野さんの経営思想



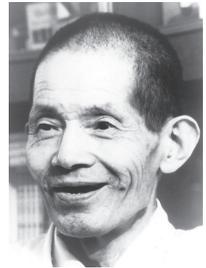
願望実現のため、当時世界一高いビルを有していたシアーズローバック社の写真を、オートボックスの創業者である住野氏は常に目に触れるところに置いていました。

の中核はここにありました。住野さんは願望実現の言葉とともに、当時世界一の小売業であったシアーズローバック社の本社ビルの写真(シアーズタワー、当時世界一高いビルでもありました)を常に目に触れるところに置き、瞬時にも「世界一になる」というビジョン、目標から心を離さないように心掛けていました。社員にもビジョンによる目標設定の大切さを常に説かれていました。オートボックスの成功はこの住野さんの信念化されたビジョン(想念)の力によって

もたらされたものである、というのが私の実感なのです。

そして「西式健康法」です。住野さんは若いころから胃腸に疾患があり、悩んでいらしたようです。またご息子が病弱であったことも悩みの種でした。そんな折、ある取引先から西式健康法の創始者、西勝造先生を紹介されたことから、西式健康法の考え方に深く影響を受けるようになりました。当時、西先生のお弟子さんの中でも特に注目されていたのが甲田光雄先生で、甲田先生が大坂八尾^{やお}で開業されていることもあり、住野さんは甲田先生を深く信頼、師事するようになりました。

前述のように住野さんの経営は独創的なものでしたが、入社したての私の眼にはかなり奇異に映りました。熱心に勧められる（というよりやや強制気味の）SMIもそうでしたが、西式健康法もおよそ現代医学の常識とは相いれない考え方で、それを熱心に社員だけでなく、お客様でもあ



甲田光雄先生。

る社員やオーナーが少なからずいたように思います。

三本目の柱「オートバックスフランチャイズシステム」は住野さんにとって単なる契約による「看板貸し」フランチャイズシステムではありませんでした。

一言でいえば、その核心は「運命共同体」「思想共同体」であってモノの見方や考え方を同じくする同志的結合を意味していました。

住野さんにとって西式健康法は単なる「健康法」ではありませんでした。

西先生や甲田先生と身近に接し、驚くような治療実績を目の当たりにしてきた住野さんには、「SMI願望実現」と共に、西式健康法の独創性は、

るフランチャイズオーナーにまで勧める住野さんには口にも出さないまでも「ついていけない」と思っている。

住野さんのモノの見方、考え方の中核を成すものになっていました。住野さんにとって西先生や甲田先生は、ポールJ・マイヤー同様にモノの見方考え方を変えてくれた恩人でもあったのです。

オートバックス健康センター

そうであるが故に、会議やチェーンの大会などに甲田先生や西式健康法（以降西式甲田療法とします）の先生をお招きし、ご講演をお願いするところが度々ありました。しかし、西式甲田療法への理解がなかなか広がらないことから、住野さんは創業の地、大東市だいとうしの会社施設を改装、「オートバックス健康センター」を開設し、そこで西式甲田療法を学び、体験する一週間の健康増進コースを始めます。

私が西式甲田療法への認識を深めたのも、このコースに参加したことがきっかけでした。

私は当時まだオートバックスの一若手社員であったのですが、既に甲田先生の知遇を得るよう

になっていました。

冒頭、船井先生とのご縁について触れましたが、まだ若かった私が甲田先生と親しくさせていただききっかけになったのが船井先生でした。

当時毎月開催されていた船井先生主催の月例勉強会に参加していた私は、毎回「目からうろこが落ちるような」体験をしていました。船井先生の講話に深く感銘を受けた私は少しでも内容を生内に周知しようと毎回一生懸命受講レポートを作成していました。若い私が経営者向けの例会への定例出席者に選ばれたのは、そのレポートが評価されたこともあったのではないかと思います。

レポートは会社の顧問でいらした甲田先生にもお送りしましたが、早速甲田先生から直接「大変参考になった」というお手紙を頂戴しました。以来甲田先生と船井レポートを介して親しくやり取りをさせていただくことが少なからずあり、甲田先生から可愛がっていただくようになった

次第です。

さて、健康増進コースですが、このコースは「症状即療法」「心身不二しんしんふふじ」「朝食抜き」「断食療法」など西式甲田療法の基本原理を学ぶとともに西式甲田療法の考え方に基づいた食事や体操、また入浴法などを実践するというもので、甲田先生のご指導を得て設計されたものでした。また、コースの目玉は二日目の甲田医院での甲田先生の「診察」にありました。

当時すでにその名声が世界的であった甲田先生の診察を受けるのは何カ月かの「予約待ち」が発生している状態でしたが、月二回火曜の午前中はコースに参加しているオートバックスのメンバーは直接甲田先生の診察を受けることが出来ました。

私が甲田先生の診察を初めて受けたのもコース参加時のことでした。甲田先生の診察は「問診とも言えない」問診のみで検査は一切なさいません。「問診とも言えない」というのは、甲田先生は

目の前の患者の顔を見、手のひらを見て、それだけで診断を下されることが殆どであったからです。特に病気があるわけでないオートバックスの参加者に何かを聞かれることは、まずありませんでした。

しかし、それだけでその人の日頃の生活態度や食事の嗜好、また症状に表れていない疾病などを指摘され、コース参加者を驚かせるということが少なからずありました。

このコースに参加して私はモノの見方や考え方が変わりました。その意味では住野さんの「狙い通りになった」社員の一人であったと言えます。

もともと理屈っぽい私にとって西式甲田療法の考え方は学べば学ぶほど合理性が高いように思えました。以来、住野さんの思惑通りに私は西式甲田療法の信奉者になりました。

しかし、その時の私の西式甲田療法への理解はまだ「頭だけ」のモノでした。それを体で納得するようになるのはその後のことです。

魔法のような甲田療法

そのきっかけは思いもしなかった体の不調でした。既に四十代になっていた私はオートバックスの幹部社員でそれなりの重責を担うようになっていました。

甲田先生は手相もご覧になりそれがよく当たるのですが、観ていただいたときに「横井さんは責任感が強くて、正しいと思ったことは貫き通す性質やな、良いことやが頑固や」という事をおっしゃって頂いたことがあります。

そういう性分が過重なストレスを招いたのでしようか、春先に引いた風邪をきっかけに、数カ月咳が収まらず、当初は倦怠感、咳は収まったものの倦怠感^{（あせ）}は強い疲労感となり、終には仕事もままならない状態になりました。この間病院も受診しましたが、確たる原因が解らず、医者^{（いしや）}の診立ては「心因性」、すなわちストレスによるものということで安定剤等の処方を受けるのみ、薬も少しは

試しましたが、一向に症状が良くなるようには思えませんでした。

困り果てた私が選んだのは前述の「健康増進コース」への申し込みでした。既に甲田先生の知遇を得ていた私は直接甲田医院に診察をお願いすることもできましたが、「西式甲田療法のごく一部とはいえ実践者の私がかんな病気になるって、甲田先生に合わせる顔がない」という気持ちが強くなり、直接診察をお願いすることに躊躇^{（ちゆうじゆ）}があったからです。

そしてフラつく体で健康センターに入所した私は甲田先生の診察を受診しました。私の顔をご覧になって、先生はすぐに異常に気が付かれたのだと思います。診察室に入るなり「横井さん、どうした？」とお尋ねになりました。

私はこの数カ月ひどい疲労感に悩まされていること、病院で診断がつかないことをお話ししました。話を聞きながら私の手のひらをご覧になっていた甲田先生が「横井さん背中を見せなさい」と

おっしゃいました。

先生は二本の指で私の背骨を上から下へとなぞられました。あるところでは指を止められて、「横井さん、腎臓がいかれている」とおっしゃり、机に向かい、サラサラと処方を書いてくださりました。さらに一言「心配いらん。一月で日本晴れになる」というお言葉を頂きました。

この先生のお言葉と処方を頂戴して、長く体の異常に苦しんでいた私は、本当に救われた思いがしました。後で聞きましたが、私の病気は「鈍重腎臓」と呼ばれるもので、検査しても血液や尿に異常が出ないものだったのです。世にいう処の「慢性疲労症候群」は鈍重肝臓や鈍重腎臓がその原因であるということも後に知りました。

処方には西式甲田療法の食事法と体操、入浴法の回数などが書かれてあります。

そこには、食事は一日二回（昼食、夕食）玄米（軽く一膳の分量）と豆腐（二百グラム）のみ、食

事はこれのみで青汁を午前中に飲むようにとあります。体操は西式健康法の「毛管運動」「金魚運動」を一日数分、数回、冷浴と温浴を繰り返す温冷浴を一日一回とありました。

早速、ふらつきながらも処方通りの食事や体操を熱心に実行しました。コース修了、帰宅後も食事や体操を続けました。

処方の実践を初めて二週間目ぐらいからでしょう。か、メキメキ回復していることが実感できるようになりました。さらに日に日に体調はよくなり、先生の「一月で日本晴れ」というお言葉通り、四週目にはこれまで経験がないうまさに五月晴れのような健康状態になっていました。私が西式甲田療法、特に甲田先生がお勧めになっている「青汁」と「玄米と豆腐」だけの食事の効力を本当に知ることになったのは、この時の体験によるものです。

甲田先生の不思議な診察と処方の方の力を経験したのは、この時ばかりではありません。その後人事

担当役員になった私は社用でも度々甲田先生にお目にかかるようになっていました。

その時も甲田先生と顧問契約に関することで相談があり、甲田医院にお邪魔しました。その少し前から右肩に痛みがあり、腕が上がらない状態が数日続いていたのですが、甲田先生とのお話が終わり、失礼する間に、思いついて右肩の痛みのことを相談申し上げました。

その時、甲田先生は私の左の下腹に視線をやらせて、「横井さん、左の大腸に宿便がたまっている」とおっしゃり、メモ書きにすらすらと食事の処方を書いてくださりました。

そこには大根を擦ったもの〇〇グラム、ニンジンも擦ったもの〇〇グラム、リンゴを擦ったもの〇〇グラム、一日二回、昼と夕、と書かれてありました。そして、甲田先生は「二日で治る、ハッハッ」と笑顔でおっしゃいました。

早速その夕食から処方通りの食事、二日目は会社に材料とおろし器を持って行って昼食、さ

らに夕食も同様の食事を一日半行いました。翌朝驚くなかれ、右肩の痛みは嘘のように消えていました。

甲田先生にはこのような摩訶不思議な診断、治療のエピソードが数多くあります。ネットで検索してみても甲田療法で救われたという無数の体験談を目にすることが出来ます。

私自身のことではありませんが、私の身近な人が体験したエピソードも面白いので紹介しておきましょう。その人はKさんと言います。Kさんも船井先生とご縁のある方で船井総研のコンサルタントとして活躍された人でした。

そのKさんから胃潰瘍が長年の持病であることを聞き、私は甲田先生のお話をし、「良ければご紹介しましょうか？」と声をかけました。Kさんは甲田先生のご存知で、是非お願いします、ということになり、早速甲田先生の診察を受け、甲田療法を実践されるようになりました。

Kさんの処方は、クリーム食（玄米の粉をクリーム状にしたものと豆腐＋白身魚）のみ、これ以外は原則ダメ、という少々厳しいものでしたが、熱心に実行、すっかり回復されました。

調子も良くなったある夏の日、出先でスイカをご馳走になる機会があったそうです。

翌日が甲田先生の診察日で「甲田先生のお顔」が脳裏をかすめました、好物でもあったので、一切れだけご馳走になりました。甲田先生のお顔が思い出されたのは、甲田先生から「果物は取らないように」と言われていたからです。「ずいぶん体調も良いし、一切れぐらいいは良いだろう」と思った、とKさんは言われていました。

さて翌日甲田医院に診察に行ったKさんが、椅子に座るなり開口一番甲田先生から「あんたスイカ食ったな」との一言。Kさんの驚いたこと、恐縮したことはそれまでなかったというのがそのエピソードです。

甲田先生と船井先生、 そして森美智代さんのこと

そういえば甲田医院に入院している患者さんが食事療法の苦しさからついアンパンを買い食いし、翌日の診察で甲田先生に見抜かれ、お叱りを受けることがよくあったと、甲田先生の一番弟子、「一日一杯の青汁だけで元気に十三年（2009年時点）」で有名な森美智代さんから聞いたことがあります。

甲田医院のご近所で鍼灸院を開業されている森さんは、そんな患者さんから甲田先生に買い食いがばれないように特別な「治療」をお願いされることがあったそうです。

その森さんですが、この月刊『ザ・フナイ』を通じて、またその他の機会でも船井先生とのご縁があったことをご存知の方もいらっしゃると思います。

船井先生が晩年、長く持病で苦しまれた折、私

は何度か甲田先生の診察を受けられるように強くお勧めしたことがあります。

というのも、船井先生からお聞きした症状を甲田先生にもお伝えしたところ、「簡単に治る」とおっしゃったからです。甲田先生がそうおっしゃる限りは、私自身の体験からも、見聞する甲田療法の実績からも船井先生のご病気が「簡単に治る」類のものであることに確信が持てました。

しかし船井先生は頑固に私のお勧めに耳を傾けられませんでした。理由は制約嫌いの船井先生にとっては厳しい食事療法を伴う西式健康法はご自分の主義に反するものと映ったことであつたようです。

甲田先生は船井先生の来訪を楽しみになさっていましたが、船井先生が甲田先生を訪ねられることはありませんでした。甲田先生もご晩年であり、往診はなさっておられませんでした。ご縁がなかったと言えばそれまでですが、その後甲田先生

がお亡くなりになり、ついにお二人をお引き合わせする機会を失うことになりました。

その後も船井先生の症状と治療は迷走します。親しい人を通じてあれが良い、これが良いと聞けば、試されて、「良くなりそうだ」とブログやご著作に書かれてはいましたが、いずれの療法も船井先生のご病状を回復させることがなかったようでした。

そんなご様子を見聞きするにつけて、これを最後と思ひ、森美智代さんに同行をお願いして、熱海の船井先生のご自宅にお邪魔することにしました。西式甲田療法をお勧めすることが目的でしたが、ビックリ現象が大好きな？ 船井先生に森さんを紹介することも目的でした。

森さんをお連れしたのは前述のように甲田先生が一番弟子が森さんだったからです。森さんは若くして難病を患ひ、甲田療法に出合い、そしてその大病を克服されます。また森さんはその体験を通じて不思議な能力を身に付けられま

した。

甲田先生がお元気なころ、後継者がいらっしやらないことを心配する私に、笑いながら「横井さん、こうして体に手を置くだけで悪いところが手に取るように判る、これは教えられるものじゃないからな」とおっしゃっていました。

森さんはお医者様ではないですが、この甲田先生の「体に触れただけで、悪いところが判る」という特殊能力を引き継がれている唯一の方です。

森さんが特別な能力を持たれていることは私自身も何度か体験しましたし、甲田先生に代わってお願ひすることになった健康センターの「診察」を受けた入所者の体験談からも、確信がありました。そういうこともあって、森さんを船井先生にお引き合わせすることにしました。このことは、船井幸雄ドットコムの2009年10月9日のコラムに詳しいので、ご興味のある方はご覧ください。

このように森さんからも熱心に甲田療法をお勧めしたのですが、「甲田先生のことは尊敬している」とおっしゃるものの、やはり制約嫌いの船井先生と甲田療法の相性が悪く、船井先生を説得することは叶いませんでした。

ただ、森さんのことは大変気に入られたようで、その後ブログだけでなく、講演やご著書でも森さんのことを紹介して頂けたのは、熱海までお連れした成果ではありました。

その後も一度だけ西式甲田療法をお勧めした記憶がありますが、却ってご機嫌を損ねる空気もあり、その後ついに船井先生とはお目にかかる機会がないままに、訃報に接することになりました。

先日久しぶりにお目にかかった船井勝仁さんにこの間のことをお話ししましたら、西式甲田療法のことは気にされていたということをお聞きしました。また、このようなエピソードを紹介する機会を得たのも勝仁さんにお話ししたことがきっかけです。

西式甲田療法の原理「症状即療法」

さて折角の機会でもありますので、ここで主要な西式甲田療法の考え方や具体的な療法に関して、私の知るところを簡単に解説させて頂きたいと思えます。

西式甲田療法の二大原理は「症状即療法」と「心身不二」にあります。

中でも「症状即療法」はもつとも重要な大原則で、これは読んで字の如く、「症状はすなわち療法である」ことを意味します。

この原理を発見した経緯を西先生は以下のように述べられています。

幼少より病弱で微熱と下痢に悩まされていた西先生を心配されたご両親は日本中の名医を訪ね歩き、診察、治療を受けますが、一向に良くならなればかりか、匙を投げた医師から「この子は長生きできません」と言われることもあったそうです。

成長して青年期を迎えられた西先生は同様の

症状に悩み続けるのですが、医師が見放すなら自分で治療法を見つけるほかないと考えるようになります。そこで古今東西の医学書や健康本を読み漁り、少しでも納得できる療法があればそれをやってみる、ということを始められました。しかし、どの療法を試しても一向に良くない兆候が見えません。思いつめた西先生はやけ気味に最後の方法として「医者のこと聞いても一向に良くならないのだから、医者のことと反対のことをやってみよう」と決心します。

そして下痢に良くないと止められていた生水の飲用、また風邪をひきやすいから厚着にするようにと言われた指示の逆、日頃寒くとも薄着にし、熱が出たら、下げるのではなく逆に厚着にして熱を上げるようにしました。

それをしばらく続けるうちに、長く続いた下痢も治まり、微熱も快癒するに至ったと言います。このことが症状即療法の原理を見出す機会になり

ました。

長く苦しんだ「下痢」も「熱」も体が良くなるようにとする「療法的」働きであったのですが、病気の原因が解らず、症状の改善にのみ熱心な「現代医学」の医師は、体が良くなるようにするこれらの反応を妨げることにしか治療法を見出すことが出来ませんでした。

よく考えれば「症状が療法」なのは当たり前のことです。何か体に悪いものを誤って飲用したとき、嘔吐で悪いものを体外に排出しようとし、胃から腸へと入ってしまえば、今度は下痢によってできるだけ早く体外への排出を行います。吐き気も下痢もこのように毒素、毒物を体外に排出する働きです。

熱も同様で体温が一度上がると免疫力は5倍になる、というのが現代医学の常識になっています。マラリアで高熱が続いたがん患者が寛解した(がん細胞が消える)例も報告されるのはこのためです。

本誌の読者の方ならよくご存知の中村天風師も、「熱が出たら下げてはならない、お燈明を上げて神様に感謝すべし」とおっしゃっています。

同様に、伊豆で断食道場を運営されている石原結實^{ゆみ}先生は「食欲不振と高熱は天下の二大名医である」とおっしゃっています。これは食欲不振^{いしはら}≡食べないことと高熱が病気を早く治す秘訣であるという意味で、症状即療法と同義です。

朝食抜きの一食健康法

症状即療法とともに甲田先生が特に健康の秘訣として強調されていたのが、少食と朝食抜きの二食主義健康法です。

甲田先生には朝食抜きを薦めるご著作が複数あります。それらの著作の副題には「朝食を抜くだけで病気の9割はよくなる」というものもあります。朝食こそ三食の中でも一番大事な食事である、という現代医学や現代栄養学の常識から言え

ば「とんでもない暴論」のように思われる「朝食抜き」ですが、少し勉強すれば朝食抜きが優れていることは直ぐ判ります。

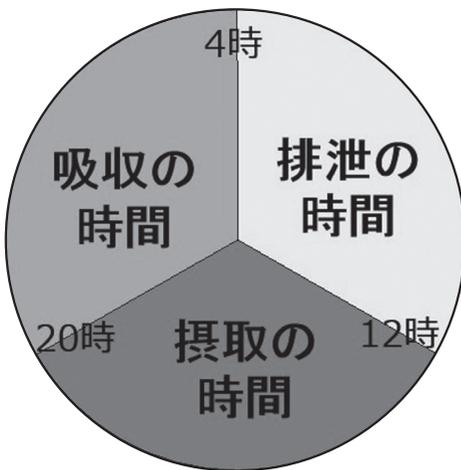
よく甲田先生が紹介されたのは、フランスのスリーエ医師による尿中毒素の実験です。

スリーエ医師は食事の仕方では尿中毒素の量に変化があることを発見します。それによると一日一食（午後）の場合に尿中毒素は一番多く排出され、朝抜きの二食がそれに続き、一番少なかったのは朝、昼、夕の三食ではなく、朝と夕の二食のパターンであったということです。

尿中毒素が多いということは体内の毒素の排出、流行りの言葉でいえば「デトックス」が盛んにおこなわれていることを意味します。

またアメリカで1200万部を超える大ベストセラーになった健康本の『フィット・フォー・ライフ』（ハービー・ダイヤモンド著）でも朝食抜きが薦められています。曰く人間には24時間のサーカディアンリズムがあり、8時間毎に摂

取（12時～20時）、吸収（20時～4時）、排せつ（4時～12時）と体の働きが変わる、排せつの時は排泄の臓器である腎臓や大腸を活発に働かせるべき時で、この時に食事をするとう消化のために胃に血液が集まり、排せつの働きを阻害する、よって午前中は食事をしてはならない、というのが著者のハービー・ダイヤモンド博士の主張です。



サーカディアンリズム（ハービー・ダイヤモンド博士による）。

「万病一元血液の汚れより生ず」という東洋医学の考え方は、すべての病気の原因は血液の汚れ、すなわち体内の毒素に依るものである、ということとです。

そう考えるならば、朝食抜きや断食に難病治療の効果が高いことも肯^うげます。なぜならそれらが、排泄、排毒、デトックスを促進するものであるからです。

特に断食は疾病治療に大変な効果がありますが、実行するのはなかなか大変です。適切な医師の指導がない場合には危険ですらあります。しかし朝食抜きの二食健康法は誰にも簡単に実行できます。ただし3食分を2食で食べるような「大食い」は逆効果で、あくまで少食が基本であると甲田先生が力説されていたことも付記しなければいけないでしょう。

心身不二と平和の祈り

最後に、西式健康法の「心身不二」（心と体は一

つのものである）について簡単に申し述べたいと思います。甲田先生は前述のように排泄を重視されてきました。中でも宿便が万病の元であるとして、宿便の排泄を難病治療の重要な要素とされてきました。宿便とは不思議なもので、一週間も断食を続けて出尽くしたような患者がある一線を超えるとバケツ半分もの便を排出して、それ以来疾病が快癒するという例が甲田医院では日常的でした。

甲田先生にとっては宿便退治が一つの治療目標でもあったわけですが。

また甲田先生が重視されたのは、体の宿便と共に心の宿便を取ることでした。甲田先生は心の宿便を「貪^{とん}瞋^{じん}痴」の三毒（仏教の説く根本の煩惱^{ぼんのう}）
貪^まり、怒^まり、迷^ま妄^まであると考えました。

これを除くために甲田先生は平和のお祈りを患者さんに薦められました。

写真の甲田先生のお祈りがそれです。甲田先生

は世界平和の祈りの提唱者であつた五井昌久先生ごいまさひさを深く尊敬されており、親しい人には折に触れて、このお祈りを薦められていました。

かく言う私もその一人で、「甲田療法で命を救つて頂き、平和のお祈りで魂を救つて頂きました」と生前の甲田先生にお礼申し上げたことがありましたが、その時の甲田先生の嬉しそうなお顔が今でも目に浮かびます。

甲田先生は「医は仁術」を体現された方でした。検査はせず、薬も処方せず、食事法を中心とした西式甲田療法で万余の病気に苦しむ人々を救われました。

「八尾の医師会で一番の貧乏医者や」と破顔はがえんされた甲田先生の慈顔が今も私の胸にあります。

限られた紙数であり、充分なことをお伝えできませんが、拙稿が読者の方に西式甲田療法をお知らせする機会となり、そのことが甲田先生への万分の一、億分の一の恩返しになればこれに過ぎたる喜びはありません。



お祈り

世界人類が平和でありますように
日本が平和でありますように
すべての人が病気を治り健康になり幸せになれますように
私達の業想念が浄まりますように
すべてのいのちの天命を全うされますように
母なる地球がいつまでも元気でありますように
守護霊様 守護神様 大宇宙の親神様
お願い申し上げます。
守護霊様 守護神様 大宇宙の親神様
有難うございます。
有難うございます。

甲田療法

甲田医院では来院される患者さん達に、西式健康法の心身の健康を完成し、更に五井昌久先生の世界平和のお祈りで、業想念(貪瞋痴の三毒)を浄化するよう、指導しております。
甲田療法は病気の根源を結局誤った想念である正しく理解し、それを浄化するよう努力することです。
二〇〇八年五月十五日。

院長 甲田光雄

甲田光雄先生直筆のお祈りと甲田療法の解説。